

# 写本『妙好人伝』の成立過程

朝 枝 善 照

## 一 はじめに

『妙好人伝』の研究は、一巻本から二巻本にどのような経過で再編集されたものであるかということが問題の一つである。写本として転写伝来した『妙好人伝』が刊行され、真宗の篤信者を「妙好人」として尊称することが一般化したようであるが、写本と刊本の内容の異同はどのようなものであるか。『妙好人伝』や「妙好人」研究の基本史料となる書誌学的研究がなされなければ、「妙好人」の評価は困難である。本稿では、一巻本としての『親聞妙好人伝』が二巻本『妙好人伝』として再編集される経過を、新資料の浄謙寺本を通じて検討を試みたい。

## 二 『親聞妙好人伝』の諸問題

現在知られている『親聞妙好人伝』は、四本である。

イ 瑞泉寺本

写本『妙好人伝』の成立過程（朝 枝）

ロ 龍谷大学本  
ハ 京都大学本  
ニ 浄謙寺本

右の四本の関係は、瑞泉寺本と龍谷大学本が近く、京都大学本は、第一話の末尾の「摩耶信士讚」が欠けている。浄謙寺本は、平仮名が使用され、「摩耶信士讚」が欠けている。浄謙寺本は、広島県山県郡芸北町の浄謙寺に蔵されるものである。浄謙寺本は、破損が著しく表紙も失われている。本文の署名と、題名の一部が判読できる。

親聞妙好人伝

寺釈仰誓記

右の如くに判読され、六話が収められている。その六話は、次の物語である。

播州治郎右衛門  
河州利右衛門女阿霜  
和州清九郎  
伊州六兵衛

写本『妙好人伝』の成立過程（朝 枝）

但州六左衛門

和州辰三郎

現存する他の諸本が十話である点から、浄謙寺本も十話が収められていたと考えられる。『親聞妙好人伝』の蒐集の期間について、これまでの推定では、「延享四年八月」を余り下らない頃に始まり、「宝暦三年十月二十四日」を経て程なく編集を完了したと考えられている<sup>(3)</sup>。この年時は、編者仰誓の二十七歳から三十三歳に至る間のことである。物語の内容は、伊賀を中心として篤信者の言行録を蒐集したものである。現在知られている写本の『妙好人伝』は、第二巻に二十六話が編集されている。この第二巻所載の二十六話の成立は、明和五年頃から収集に着手、天明四年の秋には、一応の成立が指摘できるようである。これは仰誓の四十八歳から六十四歳に相当している。『親聞妙好人伝』と写本の『妙好人伝』を比較すると、妙好人の言行録が編纂された時期は、宝暦年間と、天明年間に大別されるようである。内容からは、宝暦年間が伊賀中心となり、天明年間は石州中心となる。次に克讓自筆写本の『妙好人伝』の署名を検討すると次の如くである。

妙好人伝 第一 伊州明覚寺釈仰誓記

妙好人伝 第二 石州浄泉寺仰誓記

右の署名の違いによって、撰述の時期が解明できる。しか

し、それは、合綴された書物としての統一性を欠くものとなつた。書名について考察するならば、安来の徳応寺の誓鑑の序が目すべきものである。

(写本)

つゝのさは石見なる浄泉寺の先師 実成院老尊者かの正信念仏の人のおほかる中にも殊にすくて世の人の軌範となるへき事の跡しあれば聞まゝにしるし集めて親聞妙好人伝となづけられき(中略)人中の分陀利たる念仏者をもまた妙好人と名づけたまふめるによりてこの書を妙好人伝と題せられたるなめり<sup>(3)</sup>

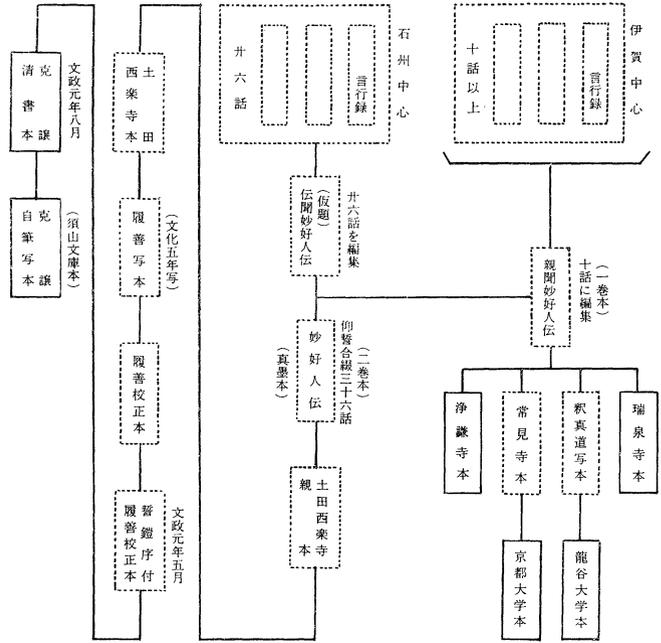
(版本)

石見なる浄泉寺の先師実成院其真実信心の人おおかる中にも殊にすぐれて世の人の則ともなるへき跡しあれば聞まゝに記し見るまゝに集て妙好人伝となづけられしハ(中略)念仏者をも又妙好人となづけたまへれば此書をも妙好人伝と題せられたるにこそあらめ<sup>(3)</sup>

(写本)と(版本)の誓鑑の序を引用したが、写本では、

『親聞妙好人伝』と『妙好人伝』の二種の書名が窺える。版本に於いては、『妙好人伝』に統一されている。この相違は、誓鑑が一巻本として成立していた『親聞妙好人伝』の存在を知っていたことを示している。写本の二巻本の署名が二種記されている点も、版本に至って、「釈仰誓撰」に統一された。ここで問題となるのは、一巻本として存在した『親聞妙好人

仮説・親聞妙好人伝、『妙好人伝』系統図



『伝』と、合綴される廿六話の編集である。版本は、この合綴された三十六話の中から再編集されて構成されている。石州中心の言行録がある段階で編集され、その数が二十六話、私

写本『妙好人伝』の成立過程(朝枝)

本に展開する系統図を推定した。『親聞妙好人伝』の中心は大和の清九郎の物語で、仰誓の見聞が中心となっている。その点で、この二十六話は、仮題として『伝聞妙好人伝』としたわけである。仰誓自身は、時間が許すならば、二十六話から選抜した物語で、十話、あるいは二十話で一巻の書物に再編集することを考えていたと思われる。その理由は、「石見助六」の物語が版本では「石州源三郎」の物語に改作されたように、未完成な物語が多いことが指摘できる。

克讓の自筆写本は、土田西樂寺本の転写本であり、「真墨本」は不明であるから、現在最もまとまった形の『妙好人伝』の写本と見ることが出来る。石州撰述の物語から年時を抽出すると天明四年(一七八四)秋の頃には仮題『伝聞妙好人伝』の原型が成立していたものと考えられる。この頃の仰誓の活動を考察すると、天明四年に『真宗法要典拠』六巻の出版を終り、天明五年(一七八五)には、『真宗小部集』八巻の編集も終了した。この天明五年には、仰誓は「石見国法義引立御使僧拜命」して国中を巡化している。この頃、仰誓の身辺は、出版のことが、一段落して、法談の資料としての篤信者の言行録の整理がなされたことかと考えられる。

三 写本『妙好人伝』と克讓

『親聞妙好人伝』は、二巻本として、再編集される過程で

結果的に『妙好人伝』として吸収されて行く。この真墨本が転写され、文政元年八月の克讓自筆写本として現存したわけである。次にこの写本の開板のことについて若干の言及をしておく。克讓の日記は『石室日記鈔』として伊予史談会に保存されている。しかし、この文書は、昭和六年に作られた写本である。さて、文政元年（一八一八）は仰誓の二十五回忌の年にあたり多くの門人が市木に参集したようである。克讓の日記は次の如くである。

夏五月念一随阿母発家 宿正賢寺

発松藩趣三津途中

郷園随母発。遠去予章城。更不勞懷橋自憐兄弟情。

四日奉謁鵬溟大和上●六月十六日紀肥後木葉村称念寺主墮狛事

右の克讓の記述に関して、石丸和雄氏は、「念一」は「朔日」、月がかわると●印を記している点で、五月一日に松山発、五月四日に市木に着き履善師に謁したと推定している。石丸氏は、松山から市木までに要した日時を調べて、文政三年四月、文政九年六月の例を紹介された。第一日松山正覚寺より中島正賢寺へ至り一泊、第二日中島より広島へ渡り教念寺に一泊、第三日山県郡千代田町中山あたりで一泊、第四日市木浄泉寺着。已刻到着の例もあり、午前中には着くことができたようである。それ故に、文政元年五月一日に松山を出発すれば五月四日に履善師に拝謁することは可能となる。誓

鑑の序に「文政はしめの年戊寅の夏さつき」と記されているように、廿五回忌の法要が五月になされ、克讓も『妙好人伝』の出版計画に最初から参加していたことが明らかとなる。克讓が『新統妙好人伝』を撰述したことも、この文政元年五月の法要に参加、『妙好人伝』の出版計画に携わったことから思い立ったものであろうか。履善師から校正本を借用して筆写したことも、克讓が『妙好人伝』の開板に生涯関係を持ち、美濃の僧純とも交流を続けたことなども、右の『石室日記鈔』の記述から推測されることである。

### むすびにかえて

写本『妙好人伝』の成立過程について、本稿では、新資料の浄謙寺本の特色と、系統図、そして、写本を所有していた伊予の克讓の出版計画参加について若干の指摘をした。紙幅の都合で論証を略した部分もある。今後の史料調査に俟つべき問題も多くひとまず擱筆する。

- 1 研究史として、見玉識『妙好人伝』小考（『近世仏教』第六巻第二号）、朝枝善照『妙好人研究の問題点』（大原野寺論集『真実の宗教』）がある。

- 2 朝枝善照「新資料・浄謙寺所蔵『親聞妙好人伝』の一考察」（木村武夫先生喜寿記念『日本仏教史の研究』所収）参照。

「浄謙寺蔵本書誌」

写本、一冊。寸法、縦二十四・五種。横十六・八種。表丁、袋綴。表紙、薄茶色（破損多し）。内題、親聞妙好人虫損。外題、不明（破損）。丁数、三十二丁（墨付二十八丁）。序文、不明（破損）。奥書、不明（破損、切り取りあり）。著者名、 寺釈仰誓。備考、前半部に破損多し。

3 龍口明生「仰誓撰『妙好人伝』編纂の発端」（『仏教史研究』創刊二十号記念）参照。

4 土井順一著『妙好人伝の研究』四六頁参照。

5 仰誓撰『妙好人伝』（伊予史談会蔵）。

6 『妙好人伝』初篇上（龍谷大学図書館蔵）。

7 朝枝善照著『妙好人伝基礎研究』三十八頁（表三）「版本にみられない物語について」参照。

8 朝枝善照（注2）論文（『日本仏教史の研究』所収）七二二頁。

9 松山市、石丸和雄氏の御教示による。記して深謝する。

10 朝枝善照著『妙好人伝基礎研究』二三〇頁参照。石丸和雄氏の御教示により克謙の参加が明らかとなった。

（その他の参考文献）

柏原祐泉著『近世庶民仏教の研究』

佐々木倫生「『妙好人伝』とその作者たち」（『仏教文学研究』第二）

福間光超「初期『妙好人伝』編纂の歴史的背景について」（『真宗史の研究』所収）

龍口明生「仰誓の妙好人観」（『仏教史研究』第十四号）

林 智康「妙好人伝の研究」（『印仏研』第廿九卷二号）

大桑 齊「仰誓の立場と『親聞妙好人伝』」（『仏教の歴史と文化』

写本『妙好人伝』の成立過程（朝 枝）

所収）

宮脇英世「浄土真宗石州派の確立過程」（『郷土石見』五号）  
小林俊二「真宗における神祇と『神祇不拝』」（『郷土石見』九号）  
（付記）本稿執筆に際し、石丸和雄氏の御教示を賜り、山口俊裕氏  
にお世話になったことを記して謝す。

（一九八六年五月末日）

（龍谷大学教授）

新刊紹介

池田魯參著

學術叢書禪仏教

「摩訶止観研究序説」

A5版・三六二頁・定価八五〇〇円  
大東出版社・昭和六十一年三月三日刊